

平成二十一年四月一日発行 第十九巻第四号 通巻第二四号 (毎月一回) 日発行  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

平成21年4月号

岡井省二創刊



# 寒椿

高橋将夫

梟の心は毬のごとくなり  
裸木がたくはへてゐる力かな  
鬼が顔洗うてゐたる寒の水  
冬耕や埋蔵金のありどころ

大寒の固まつてをる靈気かな  
ゆきずりの寒紅梅でありしかな  
四代の頂点の母日向ぼこ  
降る雪は灯ともしのもとに集まりし  
冬の川眠るがごとく流れけり  
短針を追ふ長針や冬北斗  
気丈さは葉の艶にあり寒椿

# 槐安集

水野恒彦

冬虹や一生ひとよを見たる思ひして  
凍蝶に音のしづもる夜明なり  
風花の消えなんとして日暮の木  
その人の鋭き声霜をかがやかす  
身のうちに崖あり靡く冬芒

延広禎一

耳朶げんに駿よき氣配鳩のこゑ  
黄不動の眼玉まんなまる四温晴  
稗搗の村に羽搏く日の出鶴  
湿原の枯れの金色枯れ渡る  
叩き独楽入鹿の首を飛ばしたる



加藤みき

人日や磨きあげたる鍋薬缶  
懸命に太箸使ひゐたりけり  
火を焚いて神や人やと迎へたる  
山犬は淬かすも面の海に溺れたり  
藁しべの底光りして冬牡丹

石脇みはる

笹鳴や平群の葬の列にをり  
大神の杉に宿りし冬の鳥  
双六や見込み違ひをしてゐたる  
生けるものすべて集まり常楽会  
どの道を行くべきなのか寄居虫は

中島陽華

ポツペンを吹くや白波消えてをり  
京に来て切狂言と冬の月  
鮫鱈の骨は魔除けよ海の家  
勾玉を連ねてゐたり風花す  
先生の尿のあとの雪五尺

栗栖恵通子

鳩悼小林喜一郎様一羽残してゐたり筑後川  
虎落笛喉かばつてをりにける  
一月の片虹入るる阿古屋貝  
大寒や千丈椰子の折れ知らず  
何喰はぬ雁首ばかり狸汁

竹内悦子

元日の葉書の上の牛の影  
せんぐりせんぐり回す大数珠春の潮  
耳一つ欝ててゐる雪の朝  
喉佛千両万両のぞきをる  
喜寿傘寿お稲荷さんの寒雀

大島翠木

煮凝やダム湖の底に自我の木々  
臘梅の香へ耳鳴りをみちづれに  
月読みの光を来ませ臘梅の  
晴天の隙軟らかき冬木の芽  
祖母は「かな」母は「はしの」や雛祭

雨村敏子

人の世の魂美しき注連飾る  
櫟の紅にはじまる種の起源  
裏白の表のいろをわたくしす  
なにはさて五臓よろこぶ七日粥  
白紙に山の匂ひや餅開く

小形さとる

今にして母似とおもふ朝若菜  
薄日差し煮凝とふ静寂しじまある  
愛ちやんのまあるい尻も春隣  
ちり鍋や西北に河ながれをる  
あたたかき勇魚の海に出でにけり

本多俊子

海と山結ぶ音なり大旦  
福鍋や湯気立ちのぼる影淡し  
初鏡森に無限の力あり  
祈る掌の六花は天に咲く華かな  
氏神のうしろ姿よ国の春

久津見風牛

朝日さす軒のしづくの氷柱して  
凍蝶や今どのおたりどの花に  
水仙や後炭の膝を進めらる  
主役なき鴨池騒ぐばかりなる  
白山の飛び込んでくる雪の窓

近藤 きくえ

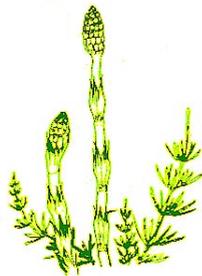
梟や森への祈り斧御神酒  
元気とは頬赤き子の筆始  
風花や六根清浄こゑ近く  
寒紅やひと日ひと日のいとほしき  
春隣笹生小径の風のコゑ

近藤 喜子

顔つつむアラブのをんな寒牡丹  
静かさやジュラ紀に続く齒朶の道  
不動智の極みなりけり寒の鯉  
寒紅を濃く荒馬を乗りこなす  
淋しさに寂しく応へ影冴ゆる

谷村 幸子

鮫小紋早蕨買うて帰りけり  
しののめの河内山城初景色  
日溜りに遊ぶ雀や仏の座  
春の寺撫でし寶頭盧艶めけり  
持ちくれし壬生菜をほめて五色豆



# 槐市集

橋本正二

宝恵かごのをんなの目尻華やげる  
湯上りの爪を染めたる蜜柑かな  
高層のビルの余白を冬の虹  
をんなかなうなじ傾け椿剪る  
枕絵のをんなおぼろの貌をして

橋本順子

鶴の吐く息の金砂となる朝  
めざめゐて布団の重さ屋根の雪  
初雪や肩の力を抜いてをる  
体内に充電しをる日向ぼこ  
思い出は美しきまま雪積る

前田美恵子

大寒の身の内覚めてゐたりける  
糲殻に深々とあり寒卵  
三方に朱の盃や根引松  
眼光の先に何あるもろがへり  
浜風にまかせるままのいかのぼり 凧

松下八重美

さまざまな鍬を束ねて注連飾る  
大海を眺めてゐたる三日かな  
右書きの新聞受けや去年今年  
雪嶺に浅紅さしてゐたりけり  
御社の杜奥深し藪柑子



# 槐集

## 高橋将夫選

伊吹山眠り葉草根を肥やす  
枚方 谷岡 尚美

初伊勢や拍手揃うてゐたりける

可笑しくてますますをかし福笑

戎笹鯛も小判も肩にのる

立春の槐座きらきら光りける

角大師角のめでたき冬木の芽  
京都 竹中 一花

初東風や闇薄れゆく花天井

寒行の念珠に星の宿りかな

東雲の六道辻や初不動

はいはいの嬰のちらかす飾かな

林冠の音なき音を聞く寒暮  
岡崎 岩月優美子

寒椿ぼとりと噂こぼれたり

日溜りの膨らみてゆく初神楽

凍雲の切れ間に夢の欠片かな

春近しルルドの聖母仰ぎをり

初夢や空くうに鯨と白象と  
枚方 富松 寛子

どんど火に祓ふ五体の表裏

寒九の水弾けるいのちありにけり

明るさの西へ西へと初山河

絵双六休みやすみて上りけり

ばら色の流れとなりし初日の出  
中野京子

半眼の奥の眼広げ去年今年

ふかぶかと日当る山の眠りかな

ていねいに五本の指に手袋す

ふたつある寒満月や空と水

まんぼうとただよひ入りぬ初霞  
東京 西村 純太

雪中にて大口論の達磨かな

月魄の鎮もり始む水仙花

驚馬老いて夢の麒麟に雪の降る

禁色の修羅の炎ほとなる牡丹焚火

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

伊吹山眠り葉草根を肥やす 谷岡 尚美

寒い冬。伊吹山が静かに眠るかたわらで、葉草が根を肥やして  
いるという。山も葉草も春に備えて、じっと力を蓄えているの  
であろう。この葉草はさしずめ伊吹もぐさにする逢といったと  
ころか。

へ 戎 笹 鯛 も 小判 も 肩 に の る

尚美

初東風や闇薄れゆく花天井 竹中 一花

初東風が吹く中、天井の闇が薄らいで花模様が浮かび上がって  
くる景はなんと幽玄。実際に見るより想像する方が美しいか  
もしれない。ちなみに、弘法大師が創建し、足利義満が再建し  
た京都の平岡八幡宮の本殿の「花の天井」には江戸時代に描か  
れた極彩色の四四枚の花が描かれている。

へ 角 大師 角 の め で た き 冬 木 の 芽

一花

凍雲の切れ間に夢の欠片かな

岩月優美子

厳冬の雲の切れ間に作者は昔日の夢の欠片を見ている。今まで  
いろんな夢をみてきたが、多くは夢のままで終わった。それが、  
厳しい現実のはざ間に残る夢の欠片なのだろう。「凍雲」も「夢  
の欠片」も暗喩。作者の心に浮かび上がり、具象化され、作品  
として投げ出された「精神の風景」。

ここで、「俳句は精神の風景」について一言ふれておきたい。

「俳句は精神の風景」として投げ出された作品は自ずから暗喩

であり作者の精神の象徴である。前掲の〈初東風〉の句は現実で、  
本句は非現実の世界であるが、精神が切り取った風景という意  
味では共に「精神の風景」。ただ、現実 is 普遍的だから、理屈  
で受け入れられるが、非現実の世界は感性で受け入れるしかな  
い。ところが、感性には個人差がある。本句のような句の鑑賞  
は結局、読者の感性に委ねるしかないのだろう。

へ 花 屑 で 埋 め る 心 の 隙 間 か な

将夫

絵 双 六 休 み や す み て 上 り け り

富松 寛子

幼い頃が懐かしい一句。賽の目まかせで、自分の意のままにな  
らぬところが面白くもあり、はがゆくもある。しかし、これか  
らの人生に置き直して考えてみると、休むしかない時はそのま  
ま休み、あくせくしないで行けたら、それはそれで結構なこと  
に思えてくる。上がるときは機嫌よく上がりたものだ。

て い ね い に 五 本 の 指 に 手 袋 す

中野 京子

わざわざ「五本の指に」と詠んでいるところから、丁寧さのほ  
どが具体的に伝わってくる。貴婦人の細い指を想像したいとい  
ころだが、悴む指にゆっくりと手袋をしている情景のほうが自然  
だろう。事態はもっと深刻なのかもしれないが。

ま ん ぼ う と た だ よ ひ 入 り ぬ 初 霞

西村 純太

まんぼうと共に初霞の中に入って行った作者。まんぼうのあの  
のんびりした感じから、漂うように霞の中へ入っていく姿がま  
ざまざと目に浮かんでくる。おおらかで好感の持てる一句。

(以下略)